

中部標準化懇話会 2022年度 第3回標準化活用勉強会 報告

開催日	2022年12月9日(金) 13:30~15:30
会場	日本規格協会 名古屋支部 セミナーホール
講演者	江崎 泰史 氏(ANALYZER 株式会社 代表取締役社長)
テーマ	レーザー傷検査装置の新市場創造型標準化制度を活用したJIS化
スケジュール	13:30~14:30 講演 14:30~15:30 ディスカッション(Q&A)
作成者	勉強会部会幹事 古田 誠 記
報告記	

自動車、一般機械等で安全性能が求められるシリンダ・バルブボディなどの円筒形状部品について、レーザーによる筒内外壁検査装置(レーザー傷検査装置)の試験方法や検査装置の性能評価の基礎となる標準試験片を、新市場創造型標準化制度を活用して標準化しJIS規格化された取組事例をご紹介頂いた。

1. 会社／商品紹介
2. JIS規格づくりのプロセス
3. JIS規格の活用

造る工程は自動化され少人化がすすんでいるものの、検査工程は相変わらず人に頼っている。また、人が目視などで検査を行なう以上、ばらつきは大きく、ミスも必ず出る。

そこで開発されたのが、加工穴内径面の錆、傷やバリなどの欠陥を、レーザー照射により非破壊で自動で検査するレーザー傷検査装置(穴ライザー)である。

ただし、どのお客様からも、この装置の「何をもって良しとするのか」「確からしさを何で保証するのか」を指摘され、「同社内の検査マスターピースで保証する」では信頼されず、販売に結びつかない。

そのため、性能を客観的かつ統一的に評価できるよう、標準試験片(マスターピース)をJIS化する活動を行ない、実際にJIS規格されたことにより、お客様からの信頼も上がり、販売に結びついた。

そのJIS規格の過程には、「申請から制定まで3年掛かった」「原案作成委員会に競合他社等を巻き込むのに苦労した」など大変な工数が必要であったが、規格化したことにより以下の大きなメリットもあった。

- ・競争ルールを自分で作ることが可能(特許とは別の意味で強力な武器)
- ・信用度が格段に高まる(優位な営業展開が可能)
- ・自社／自社製品の位置付けが明確になる(どこで、どのように戦うべきか)

中小企業、ベンチャー企業では、新しいものを作ってもなかなかお客様に振り向いていただけないことがあるが、「新市場創造型標準化制度を活用したJIS規格化」という手段によって販売につなげ、市場を広げた事例を、メリット、デメリットも含め分かりやすく説明いただけた。